

令和5年第2回教育委員会定例会 会議録

1 開催日時 令和5年2月15日（水）午前10時～午前10時45分

2 開催場所 第3委員会室

3 出席者

【教育長】 水田 博和

【委員】 竹田 卓弘

【委員】 大野 みどり

【委員】 浅井 敦臣

【委員】 向 文緒

【事務局】 教育部長

西野 正康

文化スポーツ部長

上田 敦

教育総務課長

児島 康万

同 課長補佐

田之上 愛子

同 担当主査

加藤 恵子

同 主事

堀 静風

学校教育課長

大城 達也

同 主幹

村上 洋

同 指導主事

加藤 喜英

同 課長補佐

梶原 和行

学校給食課長

加藤 純也

文化財課長

村松 一秀

野外教育センター所長

木全 敦彦

同 主幹

生倉 勉

文化・生涯学習課長

田中 芳樹

スポーツ課長

金田 浩

図書館長

田中 裕子

食育推進給食会企画経営課長

長江 泰典

4 議 題

- (1) 春日井市内小中学校で使用しているクロームブックについての実態調査請願書

(2) 新型コロナウイルスワクチンについて親子で考える機会創出についての請願書

5 議事概要

教育長	本日の傍聴者は4名です。
教育長	春日井市教育委員会会議規則第6条第2項の規定により、会議録署名人は、竹田委員を指定。
教育長 (報告事項)	第8波の収束が見えてきました。それに反してインフルエンザが急増しています。1月以降、9校15学級で学級閉鎖を行いました。 中学校の卒業式まで3週間あまりです。この時期は生徒指導上の問題が起こりがちですが、現在は各学校とも落ち着いていると把握しています。昨年度同様、換気などの感染症対策をして、卒業生にとって感動のある卒業式が行えるよう、今後も万全な体制を取って参ります。 愛知県公立高等学校入学者選抜は、令和5年度から、新しい入試選抜制度で実施されています。推薦選抜・一般選抜いずれも実施日が早まり、一般選抜が卒業式前の2月22日に実施され、合格発表は3月9日です。 各学校では、令和4年度の取り組みについて評価をし、令和5年度の構想を練っているところです。校長会議などの機会を通して、児童生徒や地域の実態に合った教育活動を進めていくよう、学校経営の重点目標をより具体的に示すよう指示して参ります。 昨年10月、第48回全日本教育工学研究協議会全国大会が行われ、春日井市のICTの有効活用について発表しました。公開校6校は、その後も公開授業研究会を行い、実践研究を進めています。今後もモデル校として引き続き研究を推進するとともに、広く水平展開を行っていきます。
教育長	1 議題 (1) 春日井市内小中学校で使用しているクロームブックについての 実態調査請願書
教育総務課長	請願趣旨説明

私は春日井市内に住む小学4年生の子どもを持つ母である。学校長から昨年9月から連絡帳を書く作業がなくなったと聞いた。私の子どもは遠視と斜視があり、クロームブックで連絡帳を開いた時に目の焦点が合わず、連絡帳に戻してほしいと担任と学校長に話したところ、「連絡帳を書くという板書作業が出来ない子どもが増えた」と聞いた。大変驚き、なぜ連絡帳を書けないのか学校長に聞いたところ、学校長も明確な理由は分からないということであった。そこで、日本では国家資格にはなっていないが、アメリカでは国家資格のオプトメトリストというビジョントレーニング専門の先生に聞いたところ、「クロームブックを長く使うことで授業の中で、何か記憶しなくてはいけない時に脳の記憶する部分である海馬が働いていないのではないか」と言われた。あくまで憶測のため実際そうであるという訳ではないが、「働きが悪くなっているのではないか」と言われた。

春日井市内には茅野晶敬先生の視覚発達支援「あおぞら」がある。2022年の活動の中に津市の特別支援教育や、稲沢市の小学校の教育委員会の方、様々な方が利用している。春日井市内にそういった素晴らしい施設があるのであれば、コロナ対策のように専門家の方に関わっていただき、視覚面、聴覚面こういった問題があるのか分析していただく。学校関係者、保護者、子ども、教育関係者、様々な方の意見を合わせ、さらに専門家に入ってもらった上で、今後、春日井市の子どもの問題点があるならどう向き合っていくのか請願が採択されるのであればアンケートを実施してほしい。春日井市は特にモデル校となっているためICTの分野で進んでいるが、小学校に入学すると9月頃からクロームブックを導入する。すぐにはタイピングが出来ない。子どもは楽しくやっている。クロームブックを導入してタイピングは出来るが、板書が出来ないというのは本末転倒で大変問題なことだと考える。学校長と話すと、学校では文房具のように今はクロームブックを使う。しかし、使わない時は机にけるなど場面で分けているということであった。しかし、子どもはクロームブックに慣れすぎており、作文を書くとき文章を書き出す際に、大変でものすごく時間がかかってしまう。今の子どもは手書きで作文を書くよりクロームブックの方が慣れている。それは大人も一緒だと考える。漢字が分からなくともクロームブックが変換するため大変便利なものではあるが、危険な部分があるのではと感じた。導

入して3年が経つ。請願にある通りクロームブックはメリット、デメリット両方あると考える。体育、国語、社会、各教科に小学校では使っている。とても便利で素晴らしい道具だと思っている。しかし、今後どのようにこれから使うのか。今の中学校では連絡帳は書いている。これから将来的に中学校も連絡帳を書かない可能性があるかもしれない。それは教頭先生も「どのように使っているのか私達も考えたい」といった発言があった。一度そういった機会をいただけるとありがたい。

向委員

新しい用具は時代の要請として使用出来るように教育していかなければならない。しかし、バランスは大切だと考える。何事も過ぎれば毒になる。実態調査をしてほしいという請願だが、既にそういった実践についての振り返りをするアンケート調査は実施しているため、その項目に追加出来るように各校へ意見を上げていただければ良いのではないかと考える。新たなアンケートをするよりも、請願書にあるような問題を感じられた部分を既に行っているアンケートにそういった情報を反映させていくことが良いと考える。通っている学校に困りごと等の問題を伝えていただけると良いのではないかと考える。

学校の先生におかれては、ICT教育に限らず常に授業改善のために振り返りを行っている。授業参観、PTA会合、連絡帳、ないしは代替手段のICTで連絡を取るといった新しい技術で対応出来るように変換している。そういった具体的な事実を知っていただけると、アンケートに問題を感じられた項目が反映されるのではないかと考える。

大野委員

請願者の発言のとおり、クロームブックの導入についてはメリット、デメリットあると考える。学校現場を見ると、学校間の水平展開がまだされていないのが現状だと感じている。そういった段階のため、実情調査は時期が早い。市内のどの学校でもICTが同じように進み、子どもの意見や保護者の考えが、広く調査出来る段階になってから調査すれば良いのではないかと考える。現段階では学校間によって違いがあり、水平展開が先だと考えている。個別の学校での調査については構わないが、調査をしても進んでいる学校とそうでない学校の差が表れるだけだと考える。今は時期が早いと考える。

浅井委員

学校教育はクロームブックだけを使用している訳ではない。まだ始

	まったばかりである。あえてクロームブックのみのアンケートを取ることにし、改善点、問題点出ると思われるが、学校教育をより良くするためには学習全体を評価すべきであり、まだ今の時期ではないと考える。
教育長	採決の結果、挙手なしで「不採択」に決定。
教育長	(2) 新型コロナウイルスワクチンについて親子で考える機会創出についての請願書
教育総務課長	請願趣旨説明
請願者	コロナワクチンについて、デメリットの面を知っていただきたく、コロナワクチン接種後体調を崩され、後遺症になった方の事例を紹介する。 1 例目、50代主婦の方のメッセージを読み上げる。 「持病で接種前から激痛があり、医師に接種の不安を訴えましたが、『打たなきゃ駄目だ』と言われました。1、2回目の接種時に1週間高熱、箸が持てず、字を書くことも困難になりました。散歩中に意識がなくなり倒れました。呼吸困難、気管の腫れで一週間入院、皮膚の炎症、過敏性腸症候群、高血圧、糖尿病と診断。以前は、低血圧でしたが、入院時の血圧は220超、脈拍130超でした。3回目接種時、病院からは『熱は出るけど大丈夫、接種してもらえないなら病院に来てもらったら困る』と言われたので打ちました。接種後ふわふわして高熱が出て、解熱剤を使いましたが2週間下がりませんでした。その後立ち上がることもさへ困難で、ほぼベッド生活。毎日死にたいけど死ぬ術もなく、このまま寝たきりになるだけで死ねないのではと焦りました。8月に友人より勧められた医師に検査していただき、異常はないが、精神科で介護を使うことを勧められました。神経内科の医師にも『ワクチンを打ったことにより、免疫がなくなり悪化して今の状態になったのでは』と言われました。現在は精神科で訪問看護とヘルパー、訪問歯科医師、訪問鍼灸、リハビリと月2回程主人に車椅子で病院に連れて行ってもらっています。嚥下も悪く食べるのもままならず、自分で窓を開けられません。何か少しでも良くなる方法がありましたら

ご教示ください。」

2 例目、40代小学生の母親の方のメッセージを読み上げる。

「私の体調は戻りません。後遺症患者さんに多く見られる慢性疲労症候群と思われ、常に疲労感でぐったりしています。最初胸のあたりの熱感が酷く外科を受診（乳腺外科）。『これはうちではない』と言われ、そのまま皮膚科に行くことになり、皮膚科を受診。『そこではメンタルヘルス科へ行くように』と言われそこで終わり。メンタルヘルス科へ行ったら、その先生にも『後遺症のことはよく分からない』と言われストップしました。一番打撃を受けたのは金銭面。出来る治療は経済力を考えずなんでもやりました。イベルメクチン、ビタミンC、グルタチオンの点滴、プロテイン、ビタミン剤の購入、サプリメントの輸入、体の気の巡りを整える水。キャッシングやりボ払いにも手を出し購入しました。働いていたところに実家のリフォームで何百万円ものローンを組んでおり、そこにキャッシングとりボ払いが加わり、債務整理の民事再生をすることになりました。ワクチンによって大きく人生が変わってしまいました。けれど、あの時に借金をして続けた治療がなければ、今の私はもっとひどい状態で、最悪は死んでいたかもしれません。大きな借金の代わりに何とか安静にしていれば、生活出来る体を手に入れたという感じです。それでも元のように働ける体は戻ってきません。自分で子どものためにお金を稼ぎたかった。子どもの服や必要な学用品などちゃんと買えるか不安でいっぱいです。こんな経済力で国に見放され、どうやって子どもを育てながら生きろと言うのでしょうか。自分が情けなく、ワクチンを打った後悔に苛まれ夜に1人で涙を流す日々です。一生の経済力を一瞬で失った。子どもを育てるためにも経済的な援助を受けられたらと切に願います。」

紹介した事例は、いずれも春日井市内在住の方、春日井市内の病院で受けたコロナワクチン接種後に起きた事例である。かなり短く読み上げた。全文は教育委員に配った資料にあり読んでいただきたい。

厚生労働省のホームページには、コロナワクチン接種後の死亡者数、令和5年1月現在1,966人、重篤者26,249人とある。

さらに引用する。「毎日死にたいと思うくらいに生きるのがしんどい体になってしまった。私は自ら接種を望んだけれど、過去に戻れるならこのワクチンは絶対打たなかったと思います。接種後、長期間に

わたって体調不良に悩まされている人は割合にすると数百人に一人、数千人、数万人に一人かもしれません。しかし、その数字の向こう側にはそれぞれの人生を送っている、生身の人間がいる。」

どうか出席者の皆様、コロナワクチンのメリットだけでなくデメリットについても知っていただきたい。打つか打たないかを決めるのは子どもと保護者自身である。メリットの情報だけではなく、デメリットの情報を知る機会を作っていただきたい。この請願が採択されることはかなり難しいと思われる。ここにいる出席者の方に1人でも良いため、コロナワクチン接種後の後遺症のことを知ってもらえたらと想い陳述している。どうか、自分の家族や自分の身に起きたらと思って考えていただきたい。

向委員

まず、ワクチン接種についての検討は、情報リテラシーの問題なのではないかと考える。ワクチン接種が始まってから2年が経ち、反対意見というのは、たとえテレビ、新聞で報道されていなくても、インターネット、週刊誌で多くの人を知っているというのが実際かと考える。ワクチン接種をしている人は反対意見を知らずに接種しているのではなく、反対意見を知った上でメリット、デメリットを勘案し、接種している方がほとんどだと考える。私も医療職であり、医療職養成校で勤務している。そのため希望する学生と共に一般の方よりも早い段階でワクチン接種をした。欧米での接種情報、自衛隊、国立病院機構の職員は先行して接種しており、その情報を調べる限り、短期的な副反応についての不安は最小限であったが、長期的な影響は不明であったため、不安はもちろんあった。これを若い学生と一緒に打って良いものか迷った。家族からも出来れば打ってほしくないと言われた。職務上の責任感からリスクはあっても、メリットの方が多く接種することを決めた。この仕事をしていなければこのように早い段階で接種をしていなかったかもしれない。

接種をしないという選択をする仲間ももちろんいたため、接種をしないという選択を批判する気持ちは全くない。学生の中には、本人は接種を希望するが、家族が反対するということで、家族関係が悪化し、接種する不安よりも自分自身の判断が尊重されないということに苦しんでいた。

コロナワクチンについて、経験から思うことは、個人が静かに検討し、自由に判断出来るということが大切だと考える。

春日井市の教育委員会は、ワクチン接種について、推奨も勧奨もこれまで一切行っていない。これは反対も賛成もしないということ。個人の自由を守り、個人の判断を尊重するためである。請願のようなテーマを学校で扱えば、何らかの同調圧力が働くリスクが高いと考える。一部の偏った情報に惑わされることのないように情報を多方面から集め、十分に吟味し判断する。そういった、情報リテラシーの教育が社会科の調べ学習や、生活科のICT利用の教育の中で実施されているところであると考えするため、こういった問題がある程度落ち着き、自分たちが距離を持って考えられる、過去の経験から学ぶというのが安全で有効だと考える。

竹田委員

ワクチンについては、道徳の授業で考える機会を各学校に案内することの請願があったが、ワクチンの体に与える影響を考えるということであれば保健体育、情報リテラシーから考えれば社会科ではないかと考える。

3月13日にマスク自由化になって、5月8日に新型コロナウイルス感染症が2類から5類に引き下がる。新型コロナウイルスに関しては、終息に向かっており、ワクチンを打って体調を崩されたというのは非常に気の毒ではある。それについて、因果関係があるかどうかについては、社会問題化しているが、将来にわたってワクチンを打つかどうか話し合うことについては、現在は、ワクチンの反対意見も色々耳に入ってきており、教育委員会が音頭を取ってみんなで話し合う機会を創出することは、時期が過ぎているのではないかと考える。コロナワクチンではなく、世の中の社会問題について、親子や学校で話し合う場を作っていきましょうと方向性を作っていくのは良いと思う。コロナワクチンに特化してやっていくということは時期が過ぎている。これ以外にも取り扱うべき問題が多くあると考える。請願そのものについては不採択と考える。

教育長

採決の結果、挙手なしで「不採択」に決定。

○参考資料について

上記のとおり、議事の経過及びその結果を明確にするためにこの会議録を作成し、教育長及び指定された会議録署名人が署名する。

令和 5 年 3 月 16 日

教育長 水田 博和

署名人 竹田 卓弘